

茨木市屋内こども広場設計・施工業務及び管理運営業務公募型プロポーザル
審査講評

令和4年10月17日に実施した第2回茨木市プロポーザル方式事業者選定委員会（茨木市屋内こども広場設計・施工業務及び管理運営業務）プレゼンテーションにおける発表順に、提案の講評を行う。

1. 個別講評

■参加者番号89

「子どもとともに創る『そだちあいの森』をめざす」という基本方針のもと、関係機関との連携を重視し、地域への広がりを意識した事業展開を計画している。

子どもたちが生きる力と豊かな感性を育めるような空間設定・遊具の設置や親子双方にとって居心地よく安心できる場所作りの観点から、豊富な類似事業の実績に基づく安定的な提案がなされた。

【設計・施工業務】

ユニークな大型遊具を用いた明快なゾーニングがされているが、年齢によって活動が分断される印象もあり、スタッフが常駐する独自提案の交流スペース「ワッカ」も、規模的に目的とされる効果が得られるのか疑問が残った。

また、空間を作る要素（床、壁等）の提案がほとんどなく、遊具周辺以外は通過動線となり、多様なアクティビティへの対応が懸念された。

芝生広場に面する場所が静的なゾーンのため内部の様子が外に認知されにくい、遊具の高さや形状が内向きで、館内や館外の人に子どもの活動が見えにくい等の指摘もあった。

遊具の入れ替えをする、という提案は独自性があったが、併せて空間の提案がなかったのは残念だった。本市にまつわる植物をモチーフに取り入れ、なかでもシンボリックな遊具として提案された松ぼっくりハウスについては、魅力的であったものの、子どもがよじ登ることへの安全性をどこまで確保できるのか疑問の声があった。

また、提出書類からは事業体の構成団体に財務上の問題が指摘され、業務の安定的な実施が危惧された。

【管理運営業務】

木育ワークショップや木製玩具等に関する提案が充実していたが、その一方、空間を前提とした提案は少ないように感じた。

要求水準は満たしているものの、子どもたちの活動を促すスタッフの人数が少なく、特

に、日常的にフロアにいるスタッフは非常勤勤務の学生が担うと聞き、不安を覚えた。2名のリーダーは事業企画運営、広報宣伝・情報発信、受付担当となっており、本部配置のエリアマネージャー、スーパーバイザーも、収支予算書において人件費が計上されているにも関わらず、本事業への具体的な関わりについて明確ではなく、体制が危惧された。

収支計画の人件費と入館料収入の対比が、少ない来館者に対応する少ないスタッフの対比につながる印象を受け、この場を運営する目標設定が消極的すぎるように感じた。遊具の入れ替えという独自性のある提案に対しても、収支計画の内訳としては明示されておらず、維持管理費に含まれるものと推察したものの、設計・施工の提案と管理運営の提案が、うまく噛み合っていない印象を受けた。

■参加者番号47

業務実施の方針を「木の香りとぬくもりの中で子どもの豊かな感性を育みます。いつでも、気軽に利用できるいごこちよい場をつくり、多様な遊びと切れ目ない子育て支援を提供します」とし、茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」（以下「おにクル」という。）の設置目的等を理解し、地元団体等との具体的な連携も念頭に入れた提案内容であった。

【設計・施工業務】

外部空間との一体性も考慮した、流れのある空間デザインであると感じた。

「立体的な公園」の入り口として重要な芝生広場に面する場所に、立体的なアクティビティが見える遊具や、アイキャッチとなるスクリーンを設置して、広場の賑わいと連動する設計となっている。また、東側の屋外遊び場に設計されている遊具は、緑道と並行して延長可能であり、敷地内から敷地周辺、まちへの繋がり意識を拡張する。

内部空間では、現設計のコンクリート床を川に見立て、車椅子やベビーカーの通行に配慮し、緩やかな曲線で動線を誘導している。その川に対して、起伏のある島状の空間は白色ロングターフの柔らかい素材で設計し、起伏の下を下足入れとすることで、子どもにも直感的に上下足分離を促している

建築のコンセプトである「縦の道」の垂直性に対して、提案は床の起伏による水平方向への展開により、双方の良さを引き立てあう提案となっており、特に「うねる大地」にはさまざまな可能性を感じさせた。立体的な視線の交わりや土間で緩やかにゾーニングされたエリアで、子どもたちは冒険心を刺激されるであろう。

各エリアは、柔軟に変化する使い方ができると提案されており、大人も子どもも思い思いに休憩したり遊んだりできることは、空間に無駄がないことにもつながるが、その反面、遊ぶ人と休憩している人が交わる場面で危険が生じる可能性もある。

例えば「うんてい」は子どもが上にのぼる可能性があるため、下に人が通るときの安全確保が必要となり、「クライミング」の落下時には、下に人がいると大変危険であること

から、遊んでいる本人の安全確保とともに、周りの人の安全確保も意識する必要があり、提案よりも多くの人員配置が必要になる可能性があるように感じられた。また、乳児エリアから授乳室までの距離と安全確保にも課題が残る。

各遊具は、家具と建築の中間のスケールのある立体的な形状であり、構造の検証も踏まえた木材の新しい使い方を提案している。建設コストのバランスも良く、極めて実現性の高い提案であるように思えた。

【管理運営業務】

提案書は随所にイラストや表が入り、文章も平易で大変わかりやすく、かつ実現性の高い内容が具体的に書かれており、市の要求に一つずつ真摯に応えているという印象を受けた。

平日と土日の時間帯ごとに示されている人員配置も現実的であり、「あそびの専門家（プレイリーダー）」、「育児コンシェルジュ」の配置も、子どもや保護者にとって心強いと思われる。ただ、プレイリーダー、育児コンシェルジュを名乗れるのは、どのような人（研修受講者なのか有資格・経験なのか等）であるかが、資料からは読み取れなかった。

施設のデザインは使い方に自由度があり、スタッフのスキルによってアクティビティの多様性が引き出される。提案では施設と人材が両輪であることをよく理解して、人材育成におけるスキルアップにも力点が置かれていた。

キャラクターの創設は子どもの興味を引く提案だが、新たなキャラクターを作成するのであれば、事前に茨木市のマスコットキャラクターについて把握の上の提案であればなお良かった。

LINE を活用した「まちもりGO」の提案では、子育て世代の利便性に配慮できていると感じた。予約やニーズの把握、クレーム処理などだけでなく、それが広報や経費削減につながる利点もあり、管理運営において大きな助けになると考えられる。ただし、それに頼りすぎると、LINE なしでのサービス展開を排除してしまう可能性も出てくるため、リピーターには大変便利で有効なツールではあるものの、LINE を使わない人、LINE を使っても登録を望まない人、遠方から来られた人や「おにクル」に他の用事で来た人等の随時利用への対応も望むところである。また同様に、提案される利用者アンケートについても「まちもりGO」利用者でなくてもアンケートに回答できる方法を検討いただきたい。

乳児のおもちゃの安全性確保について、消毒は1日1回ではなく、もう少し現実に即した方法を再検討いただく必要を感じた。

設計と管理運営の制作コストはバランスがよく、初期投資をしっかりとメンテナンスコストを下げる工夫がされているが、収支バランスにもそれが反映されていて、人件費を下げることなく、指定管理料を低く抑えていることも評価できる。

■参加者番号13

「小さな“きっかけ”から大きな“わ”へ」を基本方針とし、茨木市の子育て支援の機能を理解するとともに、「おにクル」の機能との連携を踏まえながら、事業体の持つ独自の製造ノウハウを生かし、子どもたちが「自分たちで考え、創造し、行動する」ことができる環境の提供に向けた提案がなされた。

【設計・施工業務】

エアチューブ（床面）とネット（高所）という、空間の高さを活かした提案であり、子どもたちの活動が立体的に視覚化される点を評価するとともに、“「動」の遊び空間・「静」の遊び空間”というゾーニングも、機能的である。

森のネット遊具が印象的な、個性的な空間であるが、ネットは提案書とは異なる白色と訂正があり、提案に示されているイラストのイメージとは異なってくる。また、物の落下に対する対策とともに、ネットの下にいる人からの見通し具合によっては、下からの視線も気にする必要が出てくる。提案書のイラストでは一重のネットで視界が透けているが、プレゼンテーションでは二重であることを確認した。

ネットを建築の躯体から支持する提案では、2階床はコンクリート中空スラブなので、引張力の支持には適さないとと思われる。また、ネットの範囲が図示されていないため、支持方法やサポート材が具体的に検討されているか疑問である。同様に、球形ネットの鉄骨フレームの荷重・サポート方法や、エアチューブの配管・メンテナンス、送風機の騒音防止対策などが図面からは読み取れなかった。エアチューブ以外の床仕上げでシナ合板+オスモの部分があるが、汚れや劣化対策を考えると最適な素材なのか疑問が生じた。

設計・施工費にはサポート材や送風機などの項目がなく、コストの根拠が確認できなかった。

疑問・検討事項が多く、提出されたスケジュールでは設計期間が短いため、現時点では実現性に懐疑的とならざるを得ず、インクルーシブの観点からも疑問が残った。

【管理運営業務】

設計提案には実現性に問題があるものの、実現すれば非常に魅力的な空間になると考えられる。しかし、床もネットも不安定な形状のため、スタッフによるサポートが随所で必要になるが、管理運営業務の提案書は、設計の独自性に即したものはなっていないように感じた。人員の要求水準は満たしていても、提案している空間と連動していないと思われるところがあった。

提案書には「職員およびスタッフを『コミュニケーター』と位置づけ、館内のご案内や、見回り、イベントの実施などを通して、積極的に保護者や子どもたちとコミュニケーションを図ります」とあったが、職員配置表の業務分掌には示されていない。また、月1回勤務の非常勤職員であるスタッフアドバイザーは子育て関連の資格保有者とされている

が、それ以外のスタッフに、保育士等こどもの専門職を配置する計画はなく、提案されている内容の実現に不安がある。

提案書の中に、ネットの耐久性について3～5年という記述があったが、指定管理期間中に材料の劣化が起きた場合のメンテナンス費用について、年度毎のメンテナンス費用の差が小さいことから、考慮の程度が懸念された。

2. 総評

89番は、提案書は茨木市の要求水準を満たしているものの、内容的にはこれまでの豊富な実績をベースにした、一般的な提案である印象を拭えず、魅力的なシンボル遊具や交流スペースも、十分に活用され、意図される効果が発揮できるのか疑問が残った。また、構成事業者の経営状況から、本事業に対する責任を負うことができない可能性もあり、マイナスの評価につながった。

47番は、デザインによる「出会いの空間」が「おにクル」のコンセプト“日々何かが起こり、誰かと出会う”に通じるとともに、屋内こども広場のコンセプトである“例えば森の中の秘密基地で遊ぶような、ワクワクした気持ちが持てる空間”とも重なっていく印象を受けた。また、保育・子育て支援のスキルを活かし、茨木市の子育て支援をはじめ、各部署との連携も期待できる。その一方、個別講評にも付されたとおり、屋内こども広場内での安全性の確保等に多くの課題が残った。

13番は、施設整備に事業者独自のノウハウを生かした個性的な空間の提案を行うとともに、そのコンセプトに森の循環を用い、屋内こども広場のコンセプトである、大きな自然に思いを馳せるきっかけをもたらす可能性を感じさせるものであった。その一方、図面では読み取れない安全上の懸念点が数多く指摘され、実現性に疑問の声が寄せられた。

以上の審査により、最も高い得点を得た47番を受託候補者、13番を次点者として選定するものであるが、47番の提案においても改善点や疑問点が指摘されているため、今後、事業契約等を結ぶにあたっては、市民の意見を聞き、市とも丁寧に協議するよう事業者に求めるとともに、審査の過程で出された以下の検討事項等について、設計及び運営時に十分取り組まれるよう付帯意見として求めたい。

- ・活動している人と休憩や移動をしている人が交わる場面（うんてい、川道、クライミング、乳児室から授乳室への移動等）での動線の安全性についての検証と対策
- ・プレイリーダー、育児コンシェルジュの運営体制での位置付けの明確化
- ・既存キャラクターと創設キャラクターの調整
- ・感染症感染予防対策を徹底した適切なおもちゃの衛生管理

- ・要求水準のより適切な反映に係る市との調整

最後に、3者の提案内容はいずれも子どもの育ちを支援する場として高い水準であったことを特筆したい。また、提案にあたっては多くの議論を重ね、多大な労力と時間を費やすなど、各社の並々ならぬ努力と熱意に対し、委員会委員一同、深く敬意を表するものである。

選定された提案に基づき今後設計へと進んでいくが、提案を最終形とはせず、市、市民、受託候補者が協力し、魅力ある「茨木市屋内こども広場」を作り上げていくことを期待する。

令和4年11月14日

茨木市屋内こども広場設計・施工業務及び管理運営業務事業者候補者選定委員会

委員長 井元 真澄

委員 山下 克之

委員 城戸崎和佐

委員 鎮 朋子